

外国人児童生徒等教育アドバイザー派遣結果報告書

都道府県名	愛知県	市町村名	岩倉市	大学名				
派遣日	令和 6 年 8 月 23 日 (金曜日) 13:30～16:30 【岩倉市日本語・ポルトガル語適応指導教室】 13:30～14:00 研修打ち合わせ 14:00～15:00 ① DLA を実際に行う 15:00～15:10 休憩 15:10～16:00 ② 「力」の見とりを共有する 16:00～16:30 ③ 「評価する」とは？教育評価と言語評価 ④ 評価を戦略的に使いこなす							
実施方法	※いずれかに○をつけてください。 <table border="0" style="display: inline-table; vertical-align: middle;"> <tr> <td style="text-align: center;">派遣</td> <td style="width: 20px;">／</td> <td style="text-align: center;">遠隔</td> </tr> </table>					派遣	／	遠隔
派遣	／	遠隔						
派遣場所	岩倉市立南部中学校							
アドバイザー氏名	南浦 涼介 先生							
相談者	岩倉市教育委員会 岩倉市日本語・ポルトガル語適応指導教室							
相談内容	・ DLA の実施について ・ 日本語指導の評価について							
派遣者からの指導助言内容	「言語の教科と教育の評価—DLA を知り、それを戦略的に使う—」と題して、DLA の実施方法から、「評価」について、さらに、「評価」に対する考え方について、グループでの活動を交えてお話いただいた。 【研修の流れと指導内容】 <u>1 DLA を実際に行う</u> ・ 本市の日本語指導担当教諭が行った DLA 「はじめの一步」・「聞く」のビデオを視聴し、3～4 人グループで、DLA の評価表をもとにアセスメントを体験。 ⇒ グループを回りながら、「直感的で良いのか」「通常の児童生徒の日本語の力を加味して良いのか」等、各グループの疑問点へそれぞれ回答。 <u>2 「力」の見とりを共有する</u> ① 各グループで評価したステージについて、全体で共有。 ⇒ 各グループの見とりの違いについて説明。 ② DLA について講義。 ⇒ グループでの討議内容を中心に、DLA の「評価」に対する考え方、間主観的评价、最近接発達理論について。							

	3 「評価する」とは？教育評価と言語評価 4 評価を戦略的に使いこなす ・ 「言語の教科と教育の評価—DLA を知り、それを戦略的に使う—」について講義 ⇒ 教育評価と言語評価の違い・・・授業で目指すことに対してどれだけ迫れたかを評価する教育評価と、日本語の力をどれだけもっているのかを評価する言語評価はまったく「別もの」。 ⇒ 言語評価は、学び手の中にある「言語能力」を測るものだったが、現代では言語的文化的不利益を乗り越えて学習参加する意欲等、4 技能以外の力も必要とされている。 ⇒ 言語評価を厳密に測ろうとすればするほど、本来の子どもの能力の可視化と応答という本来の目標と離れてしまう恐れがある。 ⇒ 言語評価を、どのようにしたら教育評価の「見取り」「価値付け・改善」「評定」に生かせるか。
相談後の方針の変化、今後の取組方針等	・ 終了後の参加者の感想を、以下に抜粋して記述した。どれも肯定的な感想だった。 「今の生徒の能力がどれだけあり、それを伸ばすためにどういう手立てができるかを共有する材料と指標をどう扱っていくか、研修を通じてクリアになった」 「DLAについて自分自身更に学びを続けることで、目の前にいる子どものもつ言語の能力を伸ばしていくこと、そして、学習参加への障壁を取り除いていくことに当たっていきたい」 「DLAの結果を子どもたちのために活用するというのは、私にとっても励みになると思った」 「DLAを実施するにあたっては、これまで『客観的に正しい指標にすること』という呪縛のようなものを感じており、ハードルが高いと感じていた。しかし、今回の研修で学校の教育評価は本来子どもの能力を伸ばすための可視化と応答であるということが理解でき、『自分が固執していた客観性』と『実施者に必要な訓練』という二つの事柄がクリアになった」 「見取り、価値づけ、評定と担任と共有しながら、児童のやる気を高めるような指導をしていきたい」 「DLA を実施する際の『認める、待つ、ほめる』という良さを大切にしつつ、学校全体を巻き込んだ DLA の利用につなげていきたい」 「『引き出せるところまで引き出して評価する』という、ダイナミックアセスメントについてのお話が印象的だった」 「私たち日本語担当者が、彼らの『一人でできる』や『助けがあればできる』ことをしっかりと引きだしていき、評価や価値付けをしていくことで、子どもたちの自信やモチベーションの向上につながるのだと思った」 ・ 今後は、今回教えていただいた教育評価と言語評価が互いに環流するような仕組み作りを目標としたいと考えている。また、これらの2つの評価の見方をもって、日本語担当と学級担任が児童生徒について話し合うことができると、より多面的な支援ができるようになるだろうと期待している。